報告用紙①

関西学院大学　研究成果報告

年　　月　　日

関西学院 院長殿

所属：社会学部
職名：教授
氏名：関　嘉寛

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	■関西学院留学　長期（滞在国：オーストラリア） □関西学院留学　短期（滞在国：　　） □宣教師研究期間
研究課題	ボランティアとマルチカルチャリズム：異質性と寛容に関する比較社会学
研究実施場所	メルボルン大学Asian Institute
研究期間	2019年　4月　1日　～　2020年　3月　31日（　12 ヶ月）

◆ **研究成果概要**　(2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

オーストラリア・メルボルン大学Asian Instituteにおいて、研究テーマ「ボランティアとマルチカルチャリズム：異質性と寛容に関する比較研究」に沿った調査研究を進めるために、受入教員とのリサーチ・ミーティングを定期的に行った。このミーティング中で、日本文化論を研究する学生向け授業で講義を行うことを決めた。この講義を通じて、日本におけるボランティアの特徴と課題との対比からオーストラリアにおけるボランティアについて理解を深めていった。

受講生からは、日本独自の地域社会や親密圏のあり方が注目を集めた。このことから、住民の地域社会に対する考え方がオーストラリアとは異なっていることがよく分かった。日本では、近隣という自発的なネットワークが基礎となり、地域社会ができあがっているが、オーストラリアでは、そのような近隣への関心や責任から生じているわけではなく、NPOのような組織が地域の福祉や教育、治安や環境保全をそれぞれマネージメントすることによって地域社会が成立していた。したがって、地域社会が住民に立ち現れてくる様相も日本とは異なり、日頃はあまり感じられないものであった（いわゆる地域自治組織は存在していない）。

さらに、地域社会を構成するNPO組織においては、宗教、特に教会が果たす役割が大きいことが分かった。日本では、NPO法人の除外条項に宗教活動を行う組織があげられるのとは対照的である。私も、留学中、教会が運営するコミュニティ・ハウスで英語授業を受ける機会を得たが、そこでは、New Comerをいかに地域社会に受け入れるかという視点からさまざまなプログラムが実施されていた。New Comerの属性は多様であり、オーストラリアのマルチカルチャリズムの状況を表していた。

そして、このような組織の運営に大きな役割を果たすのがボランティアであった。そのような意味で、オーストラリアにおけるボランティアは多文化的な地域社会を構成する重要な要素でありといえる。例えば、ビクトリア州のボランティアコーディネーション組織であるVolunteering　Victoriaの2018年年次報告書では、Our Vision is resilient communities and empowered and active citizens through volunteeringと冒頭で述べられ、オーストラリアにおいてはボランティアが地域の持続性や自律的な市民をつくり出す契機であること、あるいはそのような存在であることが望まれていることを示唆している。

また実際に、1月には教会が行っている低所得者への配食活動にボランティアとして参加した。この参与観察では、ボランティアが地域社会の社会福祉システムに組み込まれていることがよく分かった。低所得者層は、人種・民族的に多様であった。彼らは、ソーシャルワーカーともに配食所に来訪してきていた。また、このような活動が持続的に運営されている背景には、さまざまな企業が支援している結果であることが分かった。食材はすべて寄付であり、メニューはその日の食材によって決められていた。さらに、私が行った活動は翌日のメニューの準備であったことからも、非常にシステマティックに運営されていることが分かる。しかも、この活動の運営を取り仕切っている人がボランティアであった。

参加している他のボランティアは、私のような一時的な参加者であったり、その人自身移民であったり、宗教的な背景が異なったりと多様な属性を持っていた。つまり、ここでのボランティアは、みずからが住む地域のためというよりも、マルチカルチャリズムという制度の中で「共に暮らす」仕組みを維持・再生産するために、自発的に参加する人びとであった。これは、日本におけるボランティアとは異なる点である。

全社協の調査にも現れているように、日本では、向社会的な動機（「社会やお世話になったことに対する恩返しをしたかった」「地域や社会を改善していく活動に関わりたかった」など）ということも多いが、同じくらい個人的な参加動機（自分自身の関心や趣味の活動から自然につながった」「仲間作りがしたかった」など）が多い。一方、オーストラリアでは、「コミュニティに何かを返したい」「課題に対する個人的な信念」「自分を生かす」といったことが、ボランティア活動の参加動機としてあげられていた。つまり、社会的な意義が彼らのボランティアへの参加動機であり、その社会は非常に多文化=異質な他者の共生を前提としている。いいかえるならば、オーストラリアにおけるボランティアは、異質性への違和感の克服の先に生じる現象というよりは、積極的に異質性を認め、それを前提として共に暮らす仕組みを実効的に作動させる活動といえることが分かった。

このようなオーストラリアにおけるボランティアは、ボランティアに参加したあとに得られたことについての意識の差としても現れてくる。日本では、「仲間ができた」「活動が楽しい」というように、活動が自分の環境に関わることがボランティアの成果であるが、オーストラリアではPatience（寛容）やTeamworkといった他者との関係性に焦点が当てられていることが各種のアンケート結果から分かった。

今回の留学では、文献や資料、および参与観察などによりオーストラリアにおけるボランティアの特徴を調査研究したが、受入教員とのミーティングでは、さらにボランティアを研究する方法論についても議論が及んだ。従来の社会学的な参与観察における研究者の立ち位置・関わり方を批判的に検討する中で、Action Research（AR）という方法論への理解を深め、研究協力体制を築くことができた。

私は、受入教員が行う大学院生向けのARに関するゼミに参加し、ARが日本におけるボランティア研究に有効であることを確信するに至った。ARは、研究者も当事者として現場に関わり、現場を積極的に変容させる研究方法である。日本におけるボランティアが異質性への違和感の特殊性を静的に理解するのではなく、社会環境の変化の中で動的に理解するために、変化に注目する必要があることを再認識した。そして、この変化に対して、観察者である研究者は完全な外部者たり得ないのだから、積極的に関わる必要があるのである。

受入教員とは今後もARによる研究を深め、アジア的な市民社会について研究ネットワークに加わることになった。そして、ARについて翻訳も共同で行うことにした。

以上が、本留学における研究成果である。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。